どのように組み立てる？

題材 六年　9ページ　一　組み立て方と字形（扉）

目標 教科書に提示してある「湖」をもとに、文字の組み立て方と字形の整え方を考えることにより、点画相互の関係と部分相互の関係に対する関心を高める。

時間 15分程度

学習活動の展開

❶ 提示してある文字の字形について、話し合う。

湖

❷ 課題を知り、解決のための自分の考えをもつ。

○教科書の文字を拡大したものを提示して、気づいたことを自由に話し合わせる。

○話し合いを通して出てきた感想や意見を、次の観点でまとめる。
＊部分の大きさ
＊部分の位置
＊部分の形、点画の書き方
＊文字の中心

○教科書の文字は、横広がりで字形が整っていないことをとらえさせる。

○これまで学習してきたことをもとに、三つの部分の書き方や組み立て方をどのように変えたら字形が整うか、自分の考えを持つことができるようにする。
＊三つの部分の大きさや位置のつり合い
＊点画のつながり

❸ 自分の考えを発表する。
・三つの部分の幅を同じにする。
・三つの部分の形を細長く書く。

❹ 自分の考えを確かめる。

〈用紙（例）〉

自分で書いてみよう！

湖

※上のような用紙を何枚か印刷しておく。

○三つの部分の幅の取り方に着目させ、字形を整えるための手がかりとしてとらえさせる。

○三つの部分の幅の取り方に合わせて、部分の形が変わってくることに気づかせる。

○実際に用紙に鉛筆で「湖」をていねいに書かせ、字形を整える方法を確かめやすくする。
＊教科書と同じ大きさの文字は鉛筆では書きにくいので、半分くらいに縮小した枠を印刷した用紙を準備する。
＊枠を三等分したものも付け加えておく。

○教科書P.14の手本と見比べ、自分が見つけ出した「字形を整えるための方法」が正しいか、確かめさせる（手本を提示）。
＊三つの部分の幅の取り方を決めただけでは、字形が整わないことに気づかせ、三つの部分の高さ（位置）を変えていく必要があることをとらえさせる。

❺ 学習したことをまとめる。
・部分と部分の組み立て方
・つり合い（大きさ、位置）

＊「さんずい」の部分の点画のつながりや間隔の取り方についても着目させる。
＊実際に用紙に書かせて、見通しをもたせる。

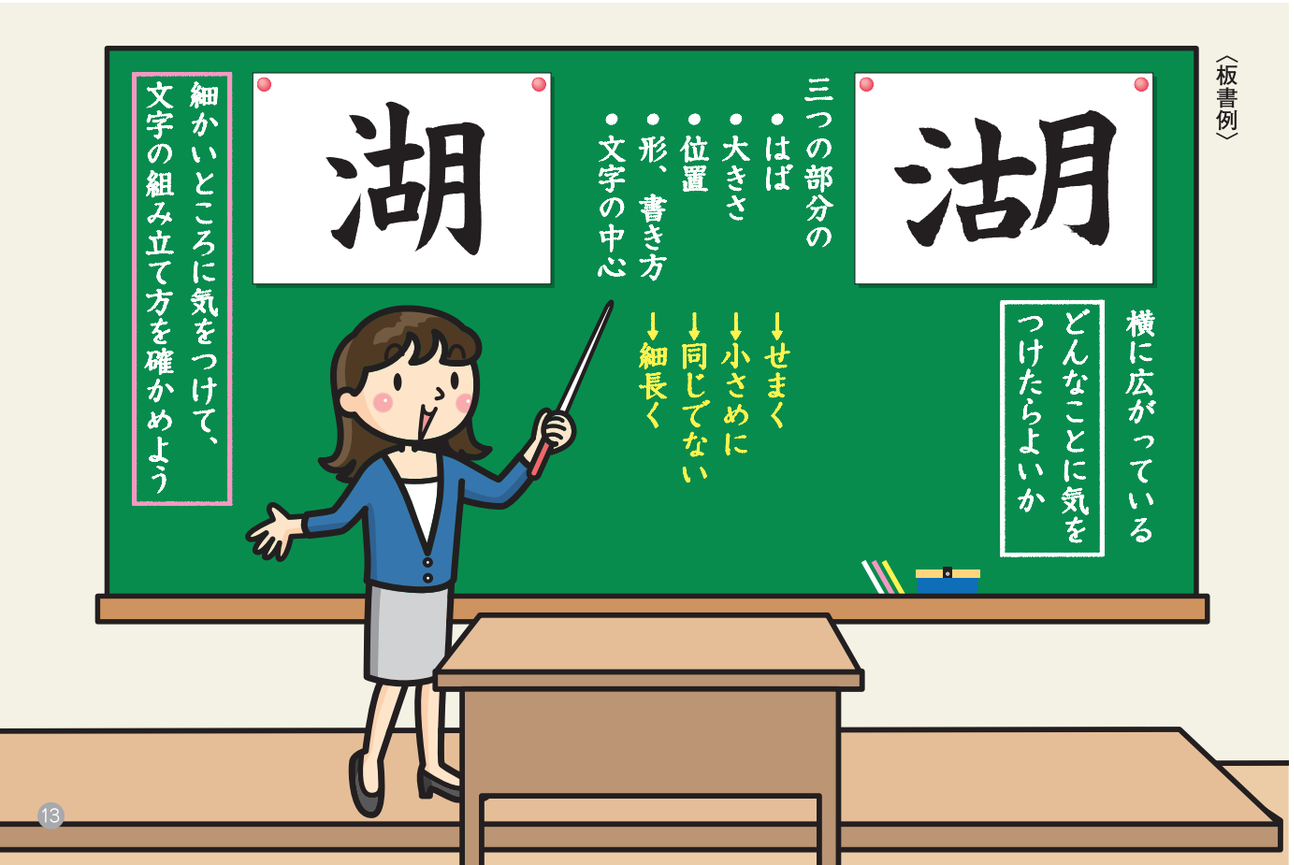
○活動を通して確かめたことをまとめ、文字の組み立て方の基本となる点画相互の関係と部分相互の関係についての意識・関心を高める。
＊字形を整えて書くためには、部分の長さや変化に気をつけて書くことがたいせつである。
＊点画の長さや方向、間隔にも気をつけて書くことがたいせつである。

扉の活用にあたって

本題材は、六年の毛筆書写の入り口となるもので、小学校で学習する文字の組み立て方と字形の整え方のまとめをする単元の導入という役割も担っている。そのため、教科書に提示してある字形の整っていない「湖」について、これまで学習してきたことを手がかりに、気づいたことをしっかり出し合うことができるようにくふうしたい。また、教科書P.14の手本と見比べることにより、「どこをどう変えたら字形が整うか」という見通しをもつことができるくふうや働きかけをしたい。このことは、以後の学習活動において、教科書の手本をどのように見ていけばよいかという視点をつかむことにつながる。

学習活動の時間は、短時間であるので、ポイントを絞り、「漢字はいろいろな文字の部分が形を変えて組み立てられている」「部分の大きさや位置のつり合いを考えて書くことがたいせつだ」ということを児童に強く意識づけたい。

〈板書例〉



デジタル教材に期待して

（兵庫県小学校教諭）

パソコンの普及に伴い、文字は「書く」より「打つ」ことが多くなった一方、テレビドラマやバラエティでは「書」が脚光をあびています。手書きの「文字」が日本人の文化からなくなることはありません。一方で、教育現場を見てみると、さまざまな教育活動の中に、パソコンやデジタルコンテンツが生かされた指導が着実に効果を上げているのも事実です。新しい学習指導要領が来年度施行となり、新しい教科書での授業を目前にした今、書写の授業の進むべき方向について考えてみたいと思います。

指導者の苦手意識をどうするか

書写の授業を組み立てるとき、教師にとって一番の障壁は「自分は字がうまくない」という意識ではないか。特に毛筆ではその傾向が強く出る。自分で毛筆を使ってきちんと書けない、書いた経験があまりない。そのために、児童に、見本を示せない、うまく書くコツを伝えられない。それだけでなく、そもそも文字の組み立て方や筆使いの難しいところを教材の文字から読み取れないため、授業のポイントをどう絞ればよいのかわからない。そこで、教材を示したら後は「よく見て書きなさい」「一枚選んで提出しなさい」という指導とはいえない指示のみの授業に終わっているということが少なくない。

これまで、ただ書くだけでなく、児童が自分自身で考えて文字に取り組む授業づくりを進めてきた。児童に今日の課題をつかませ、課題にあった練習をして、まとめ書きをする。このとき、課題をきちんとつかんで練習しても、なかなかうまく書けなくて児童が充実感を味わうことができないということが起きる。それは、児童に「どうすれば課題を達成できるのか」を指導できていないからだ。つまり、「どのように筆を動かし、どこで力を入れ、どんな練習をすればよいか」が教えられないので、やみくもに書かせることになり、あまり上達しなかったということになってしまう。「どのように筆を動かすのか」を伝えるには、目の前で書いて見せるのが一番わかりやすいであろう。しかし、書けない教師にとっては至難の業である。そこで、実際に書いているところをＶＴＲに撮って、授業をしてみたことがある。

自作ＶＴＲを活用して

教材は四年生の「馬」である。特に文字の下半分に焦点をあて、点画ピースを使って横画の長さや四つの点の違いに気付かせた後、文字の上部を印刷した練習用紙を使い、それぞれに練習を始めた。おおかたの児童が一度書いたところで、「思ったように書けないよね」と声をかけ、ＶＴＲを見せた。「筆の先はどこを通っているかな」「速く書くのはどこかな」などと声をかけながら、二回ほど見せた後で教師の空書きに合わせて児童にも空書きさせ、リズムを確かめた。再度、練習に取り組んだ後、まとめをした。

正しい筆の動きを見た後は、折れの止まり方やはねの筆使い、点の始筆、終筆などに気をつけて正しく書けるようになっていたのは、ＶＴＲの効果であろう。実際に、水書板で一斉に見せるよりも、アップで筆の動きが見えるので、筆先の動きなどがわかりやすい。また、繰り返し何度も見ることができるので、練習しながら再度見て、自分の筆使いでいいのか確かめたい、もう一度見たいという児童の要求に簡単に答えることができる。児童にとっては、授業の中にＶＴＲが入るだけでも関心を持つことになり、自分が書いた後に、ＶＴＲを見て確かめることでさらに意欲的に目標を持って練習できたようであった。書けないと感じている教師にとってはもちろん、そうでなくても、ＶＴＲの導入は授業のレベルアップになると強く感じた。

ただし、問題もあった。カメラの撮影技術である。その方面では全くの素人状態であったため、撮影に苦労した。筆先をうまくとらえたいのだが、どうしても斜めからの撮影になり、実際の児童の視点とはずれてしまう。真上からだと、手が邪魔になる。さらに、書いている線と筆先の境界が分かりにくかった。それでも、これがあるとないとでは、授業のレベルが大きく違うので、全教材でＶＴＲを作って市内の学校に配布したかったのだが、時間と費用の問題で実現できなかった。

デジタル教材の効果とは

デジタル教材を使用することで得られるメリットはいくつか考えられる。まず、単に書くだけだった授業に変化が生まれ、児童の関心・意欲が大幅にアップすると思われる。今まで、なかなか視覚的にとらえられなかった筆使いを提示でき、児童の様子に合わせて繰り返し提示することで児童の技能も伸びて行くであろう。書けない教師はもちろんだが、書ける教師にとっても、使いようによっては自分で書いてみせる以上の効果が得られる。新しい学習指導要領に示されている「筆圧」も児童に実感させるのはなかなか難しいことであるが、デジタル教材があれば視覚的にとらえやすいのではないだろうか。

また、点画ピースの作成・操作が容易になる。拡大コピーの普及によって、拡大手本や点画ピースの作成は一昔前と比べると格段に簡単になった。それでも、何枚もの点画ピースを用意するのは、かなりの時間を要する。デジタル教材に点画ピースがあれば、作成の時間が不要になり、使用するつもりなく授業した場合でも、児童の様子に合わせて、臨機応変に組み込むことが可能となる。

さらに、点画ピースを「編と旁」というように分けて使用できれば、文字の組み立て方を考える資料になる。点画ピースをパソコンの操作で長さや大きさを自在に変えることができれば、部分の組み合わせ方や形の変化などの学習が一目瞭然になるだろう。また、文字の大きさや配置を変えることで、配置を考えることもできる。使い方によっては、児童が自分で考えて操作し、文字の正しい組み立て方や配置を導き出す学習につなげられよう。

進化する教材で拡がる授業

一方、授業に直接取り入れない形の効果も期待できる。前述の点画ピースの作成もその一つだが、学習する文字を教師が研究する大きな助けになるはずだ。正しい筆使いを知ることもできるし、接筆の違いや配列を実感することもできよう。また、運筆のスピードを知ったり、折れやはねで筆を止めるところをつかんだりすることもできる。事前にこれらのことを教師が知っておくと、児童に的確なアドバイス・声かけができるのだが、これまでは実際に書けない教師にとって大きなハードルであった。デジタル教材は、このハードルを跳び越えさせてくれる助けになると期待している。

しかし、実際の使用にあたっては問題もある。一番大きな問題は、教育環境の問題であろう。デジタル教材を簡単に使用できる教室は、まだそう多くない。電子黒板を使用できれば理想的であるが、パソコンルームに設置されているだけの学校では、そこで書写の学習を行うことは難しいであろう。また、実際に「書く」という学習活動に「見て考える」だけでなく、デジタル教材を「操作する」という活動をいかに効率的に、時間のロスなく組み込んでいくかという問題もある。いずれも、実際の授業を経て、今後の研究の積み重ねに期待しなければならないことである。

それでも、なお、デジタル教材を児童に届けたいという思いがふつふつと沸いてくる。考えただけでも「早く授業がしてみたい」そう思わせる魅力がデジタル教材には秘められている。

連載 第一回

コンドウアキの書写的生活

平成23年度版 新版「小学書写」の表紙イラストとキャラクター〝ショパンとパンジー〟は、コンドウアキさんに描いていただきました。

コンドウアキ

キャラクターデザイナー・イラストレーター・作家。「リラックマ生活」シリーズのほか、「うさぎのモフィ」、「みかんぼうや」シリーズなど著作多数。文具メーカー勤務を経てフリーとして活躍する傍ら、二児の母として育児に奮闘中。

■わたしの習った教科書

微笑む虎

小学書き方 六年

（岡山県小学校教諭 四十代）

三十五年ぶりに小学校の時の教科書をこうして手にしてみると、忘れていた懐かしい記憶が一つ、また一つと不思議に蘇ってきます。

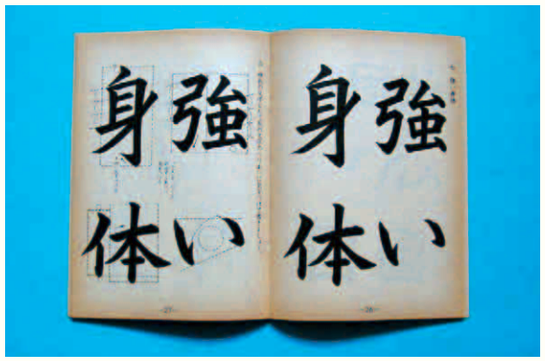
小学二年の時から近所の書道塾に通っていた私は、六年生の時には最高段位を取得していたほど、毛筆には自信がありました。ですから、学校の習字の時間には、先生のかわりに範書を頼まれることもありました。

クラスの友達みんなが（とは言っても、二十人ぐらいの小さな田舎の小学校ですが）、私の机のまわりに集まってきて、注目を浴びながら筆を動かすという経験は、少しの緊張感と快い優越感を味わうことのできるひとときでした。

そんな気持ちとは裏腹に、なかなか思い通りに書けないこともしばしば。塾で畳に正座して書けば、そこそこ書けるのに、学校のあの机と椅子では、どうしてうまく書けないんだろうと、表紙の虎に問いかけてみたり…。

昭和46年版 大阪書籍教科書

そんな時、表紙の虎は私にっこりと微笑みかけながら「気にすんなって。」と語りかけてくれているようで、「今度はがんばろう。」という気持ちにさせてくれました。

今でも、小学校教諭として、書写に携わっていますが、自分の字は、ついつい右上がりがきつくなりがちで、癖が出ないように注意して書くようにしています。しかし、この頃の教科書の文字を見ると、今の教科書の文字よりも若干、右上がりが強く感じられ、自分の癖の原点はここにあったんだなあと思ってみたりしています。

書写の教科書は、今も昔も、手書きの文字があふれていて、心が落ち着きます。小学校の時の担任の先生たちはチョークの文字も赤ペンの文字も美しかったです。今の先生方も、パソコンの文字に頼りきらず、子どもたちから「先生の字、きれい。」「先生の字、丁寧な字。」と言われるように、手書きの文字を使う機会を増やしてほしいと思います。